

第一問

次の文章を読んで後の問いに答えよ

「キャバクラに連れてってやるよ」

先輩がそう声をかけてきたのは、入社してから一ヶ月ほどがたった五月の初旬のことであった。先輩の歯は白い陶磁器のように輝いていて、入社直後の挨拶回りでこの歯を目にしてからずっと、もし私を風俗に連れて行く人がいるとすればこの人に違いないという謎の確信があった。だからその日、先輩が意味ありげな笑みを浮かべながら仕事終わりの私にその声をかけてきたとき、私はうまく驚くことができなかった。

「行きましょう」

それは、自分でも感心してしまうくらいに淡白な声であった。

「なんだよ、別に行きたくないならいいけどさ」

先輩の綺麗に手入れされた眉毛がびくりと跳ね上がった。それは可愛くない後輩の予想外の反応に動揺した風であった。私は慌てて手を振り、「いや、めっちゃ行きたいっす、めっちゃ行きたいっす、すいませんつい急なことどびっくりしちゃって。よろしくお願いします！」と、持てる愛嬌の全てを先輩めがけて投げつけた。

私の慌てっぷりを見た先輩は満足げな笑みを浮かべながら私の両の肩に手を置くと、「まあ俺に任せときな」と言った。袖から除いた先輩の口レックスがいつも以上に眩しかった。

先輩と私と、それからもう二人ほどの男社員を乗せたタクシーは太田町へ向かっていた。私はこれから始まるであろう女性たちとの饗宴に高ぶる胸をなんとか押さえつけるのに必死であった。

「ニシ」——それが私の名前であった——「風俗は初めてか？」

助手席に座っている私に聞こえるように、後ろに座った先輩がずいど身を乗り出しながら尋ねてきた。

「え、あはいそうですね。めちゃくちゃ緊張してます」

「まあ安心しろって。女の子がリードしてくれるからさ」先輩がそう返すと、その横に座っていたもう二人の先輩も身を乗り出しながら会話に加入ってきた。

「そうそう、向こうはプロだからさ、安心しろって」

「俺も初めて風俗行ったとき思い出したわー」

「お前最初緊張してなんも喋れてなかったもんな」

「ちよ、なんで覚えてんすか」一番若い先輩はいじられて少しムツとした風であった。

私はこの温かい空気がなんだか嬉しくて、「やっぱ先輩と一緒に安心できますよ」という言葉がつい口からこぼれてしまった。すると、私の言葉を聞いた先輩たちは一瞬沈黙したかと思うと「だってよ」「いやー」「いいねえ」などと口々に囁し立てた。後部座席から微かに照れの空気が漂ってきて、私はやはりこの温かい空気が嬉しくて仕方がないのだった。

現地に到着したのは夜も七時を回ろうという頃であった。華金の太田町の駅前には、大学生もサラリーマンもOLも皆どこか浮かれていて、これから始まる夜を楽しもうという気概に溢れていた。駅前の店々の看板はどれもチカチカと輝いていて、人々の喧騒と相まって夜の街は活気に満ちていた。

私たちは一旦駅の東口でタクシーを降り、そこから線路沿いの細い道へと入っていった。その日は昼に雨が降った後急速に冷え込み、雨上がりのねっとりとした空気が冷たい風に乗って私たちを襲っていた。だから、先輩が店脇に煌々と輝く『Club King』と書かれた看板を指さして「ここやね」と言ったとき、私たちは皆小さな声で口々に「わぁ」と歓声を上げてしまったのだった。

その店は小さな雑居ビルの地下一階にあった。狭い階段の壁にはあちこちに王冠のロゴと『Club King』と書かれた大きな看板が据え付けてあって、私はその圧迫感にすっかり怖気付いてしまっていた。

先輩たちはタクシーを降りてから口数が少なくなり、たまに誰かが「寒いな」などと呟いても「おう」とか「ですね」とかいう短い返ししかなくなっていた。それがいざキャバレーへの階段を降りる段になると、皆すっかり黙ってしまって、壁や天井をキョロキョロと見回しながら歩みを進めているのであった。

私はというと、そんな先輩たちを観察するのに必死であったから始終無口であったのだが、階段を降りきり曇りガラスが嵌められた茶色い重厚

な扉を前にした段階で急に胸に緊張が溢れ、「ふううう」と大きな息を吐いてそれを逃がしてやらねばならなかった。しかしその私の大きなため息は張り詰めた空気をプチンと破り、先輩たちの口からは軽やかな笑い声が漏れ出てきた。

「おうよ、リラックスリラックス」

一番若い先輩はそう言って私の肩に手を回しながら気分がよさそうに体を揺らした。

「なあに、俺たちに任せろって」

私を誘った先輩も、愉快そうに私の表情を観察しながら笑っていた。

「それじゃ、いっちょ行きますか」

タクシーの中で後輩をいじっていた一番年配の先輩もまた、その空気が嬉しかったようで、今しかないとでもいうふう^イに力一杯ドアを開けて私たちを中へ誘った。そうして私のキャバクラデビュー戦が始まったのであった。

(三田村しようた「友人の話、キャバクラまで」による)

設問

(一)「私はやはりこの温かい空気が嬉しくて仕方がないのだった」(傍線部ア)とあるが、どういうことか。説明せよ。

(二)「今しかないとでもいうふう」(傍線部イ)とあるが、どういうことか。説明せよ。

